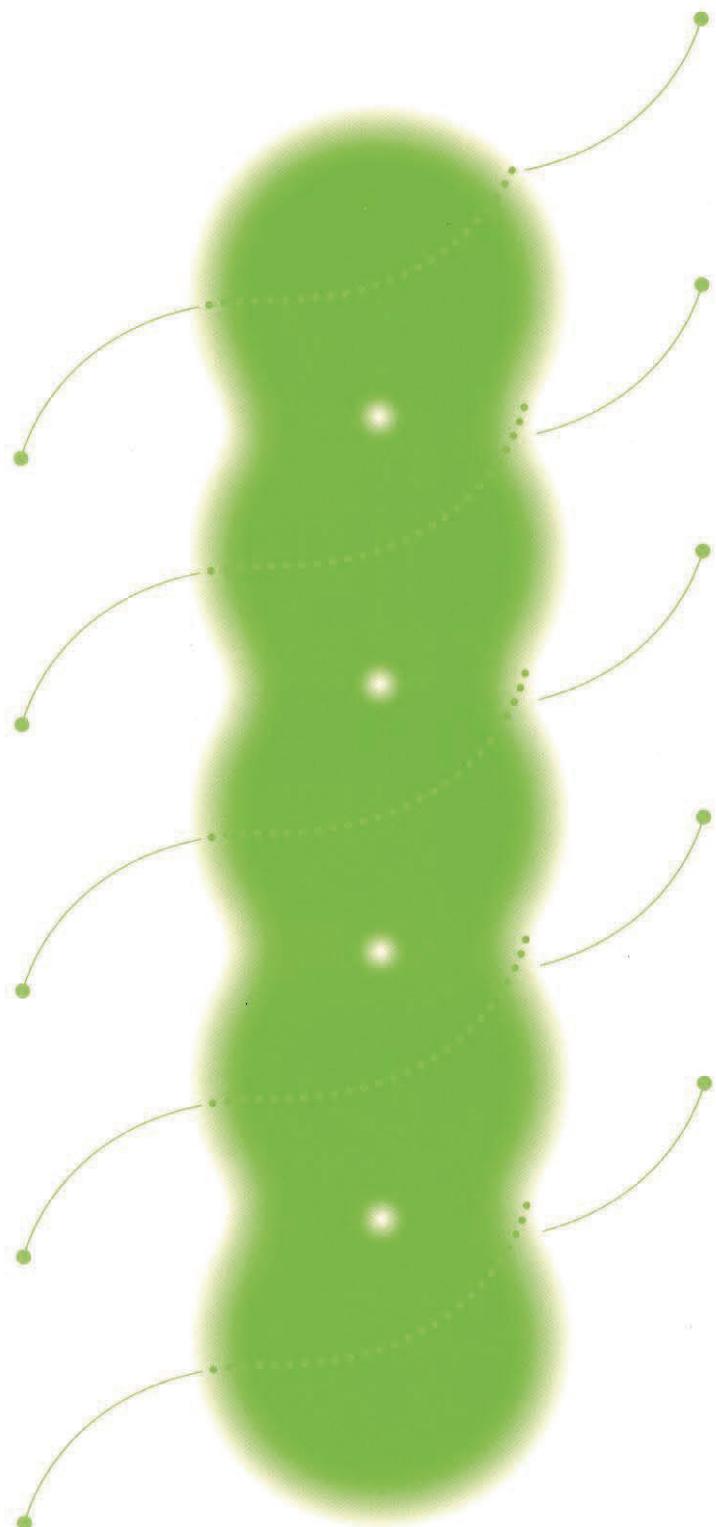


DIALOGUE 2007

京都とユニバーサルデザイン



京都デザイン団体関連協議会

第26回 京都デザイン会議

京都とユニバーサルデザイン

日 時 平成18年10月23日(月) 16:00~17:00 場 所 国立京都国際会館イベントホール

KYOTO and Universal design

パネラー 荒川朱美

京都造形芸術大学教授(建築デザイン)

パネラー 北條 崇

京都精華大学非常勤講師(プロダクトデザイン)

進行 大石義一

京都造形芸術大学教授(建築デザイン)京都デザイン協会理事





大石 義一

ユニバーサルデザインとはどのようなものか、どのように取り組めばいいのかということを、我々デザイナー自身がもう一度見直し、考え直してみたい

大石 「第26回京都デザイン会議」
を開始します。

京都には、デザイン系の協会、団体が11ほどあり、それを束ねる形で京都の団体の連携協会があり、京都府の後援で毎年「京都デザイン会議」を開催しています。ここ数年は、幹事団体として京都デザイン協会が、生活とモノ、伝統工芸とデザインとのコラボの在り方等、特にプロダクトデザインについての会議を進めてきました。

今回、「国際ユニバーサルデザイン会議2006in京都」の中で「京都デザイン会議」を開催することになりましたのは、「できるだけ多くの人々に利用していただける製品づくりはないだろうか」という京都デザイン会議の一つの方向性が、ちょうど今回の国際ユニバーサルデザイン会議のテーマと共通するものがあったからです。

実は、デザイン協会の我々もユニバーサルデザインについてよく理解していないところがあります。むしろユニバーサルデザインとは

どのようなものか、あるいはどのように取り組めばいいのかということを、我々デザイナー自身がもう一度見直してみたい、考え方でみたいということで、今日の話を進めたいと思っています。

本日は、京都造形芸術大学の荒川朱美さんとプロダクトデザイナーの北條崇さんにお見えいただいております。まず、荒川朱美さんは、大学でユニバーサルデザイン研究会の顧問として学生と研究されていますが、ふだんの活動をご紹介いただければと思います。

荒川 ふだんは、特にこれがユニバーサルデザインだという気持ちで活動を行っているわけではありません。ユニバーサルデザインやバリアフリーに関心を持っている学生が何名かおりまして、半ば引きずられるような形で一緒に勉強していこうという研究会を作ったのが4年ほど前です。

昨年は(2005年夏)、学生たちがぜひ行きたいというので、ユニバーサルデザイン先進国デンマークとスウェーデンの現況を視察しました。その中で、私や学生たちが思ったことは、一つ一つのデザインも大切ですが、いちばん大切なのは人の気持ちだということです。

デンマークのコペンハーゲンやスウェーデンのストックホルムに行く前は、ユニバーサルデザイン先進国ですから、きっと公共的な道路や公園の床はすべて平らで、分かりやすいサインがあり、道に迷うことなく、段差はすべてスロープで結ばれているというイメ





相手の気持ちに立つて

どうしたらいいかということを考えてみることが、
まずユニバーサルデザインの第一歩

荒川朱美

私は今、四条烏丸の近くに住んでおりますが、よく四条烏丸の交差点で外国のかたに「京都駅に行くにはどうしたらよいか？」と尋ねられます。京都の郊外ではなく街の真ん中で道を聞かれるというのは、すごくまずいのではないかと思います。つまり、きちんとしたサインが無く、方向性も分かりにくいわけです。できるだけ地下鉄やバスの乗り場まで案内していますが、そういう意味で、相手の気持ちに立ってどうしたらいいかということを考えてみることが、まずユニバーサルデザインの第一歩だと、最近学生たちと話しています。

また、プライベートな話で恐縮ですが、今まさに私の母が倒れて入院中で、退院時に向けてどう住

一歩を勝手に持っていました。ところが、行ってみると向こうは古い都市ですから、京都と同じように歴史的な建造物や古い道路があって、それを全部フラットにできるわけがないということが分かりました。

実際に、石畳の道はガタガタですし、そこから車道に出るときには大きな段差があります。でも、そこへ乳母車を押した若いお母さんや車いすの人、自転車の後ろに小さなリヤカーのようなものをつけて子供を乗せて引いている若いお父さんが通りかかりますと、その場にいるみんながすぐに手を差し伸べて一緒に段を乗り越えていくのです。そういうことがごく当たり前にできることにいちばん驚きました。



環境を改善していくべきいいのか、すごく悩んでいるところです。娘や息子はちょっと離れていましたから、毎日ケアには行けない。そのときに、気持ちで何とかしろという話は通用しないわけです。気持ちをバックアップするだけの設備が必要になります。そういう問題に直面しています。

そのような形で、ユニバーサルデザインとかバリアフリーとか、さらにもっと大きい視点から京都市をどうしたらいいかということを少しづつ考えているのが現状です。

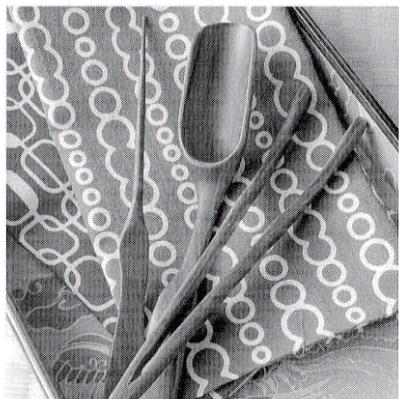
大石 北條さんは実際にユニバーサルデザイン的なこともされていますが、お仕事をご紹介しながらご説明していただければと思います。

北條 私は企業の中でデザイン活動を13年ほどしていました、今はフリーランスで活動しています。企業の中で行ってきた活動と、外に出て、主に京都や地方の伝統産業に関わる仕事をしてきましたので、その中のユニバーサルデザインについてお話ししたいと思います。私は、大阪の住宅設備を作る部署でデザインをしておりました。主な担当商品はトイレや洗面化粧台等です。

商品開発に於てバリアフリー対応は、住宅への高齢化対策への要望から以前から行われておりました。私がユニバーサルデザインに深く関わるようになったきっかけが車いす用の洗面台の開発です。洗面台というのは普通一家に1台しかありません。ですから、車いすのかたが使われる洗面台といつても

一般のかたも使われます。そこで、車いすのかたにも一般のかたにも使いやすい、公共の場所にあるものに近いユニバーサルデザインの考え方でデザインを進めました。

とにかくユーザーのそばに行き、ユーザーに聞いて、デザインしていかないとダメだということを開発するときにすごく感じました。実際に動作をしてもらい、ここが使いやすい、ここが使いにくいということを直して商品にしていきました。ユーザーのかたに近づいていくのがユニバーサルデザイン



の基本だと、改めて感じました。その後、フリーランスで仕事をする中で、地場産業をいろいろ見て回りました。

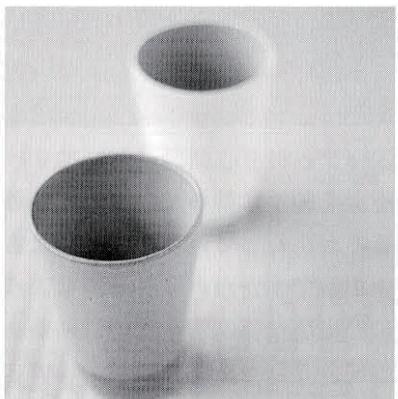
京都は陶芸、手ぬぐい、金属を打って器にする鍛金など、職人さんが非常に多く集まっています。こういった職人さんにお願いしてオリジナルなものを作りたいという活動をしていました。

ユニバーサルデザインを考えるとき、大企業だけではなくこういった小さなモノづくりのところでもユニバーサルデザインの取り組みができる

ないかと最近考えています。

ユニバーサルデザインの考え方には、一つの製品が皆に使えるというものだけではなく、メガネや洋服の様に機能やサイズなどが様々な製品があってその中から自分に合ったものを選べる、というものもあります。そういった考え方でモノを作るのであれば、モノづくりの規模が大きくても小さくともそれぞれに適したユニバーサルデザインのアプローチがあるのではないかと思います。

例えば、職人さん手打ちの切り出しナイフは、買う人に合わせて



カスタマイズが簡単にできます。左利き用に変えたい、もう少し持ち手を大きくしたいというときは、何ら生産設備を替えることなく簡単にできます。逆に、大量生産のカッターナイフは値段は安いですが、デザインの変更や品種を増やすには大きな投資が必要になります。

職人さんは人を見てモノを作ります。そのような人に寄り添う形のモノづくりはユニバーサルデザインに非常に向いていると思います。特に京都にはすばらしい職人がたくさんおられますので、ユニバ-



北条 崇

人に寄り添う形のモノづくりは
ユニバーサルデザインに非常にに向いている

サルデザインを通したモノづくりができるのではないかということを最近は強く感じています。

大石 「京都とユニバーサルデザイン」というテーマですが、京都という街、あるいは京都の持っているモノづくりの伝統とユニバーサルデザインとがいきなり出会ったわけではなくて、もともと京都にはユニバーサルデザイン的なもの、非常に普遍性のあるものがたくさんあるのではないか、個人の要求とデザインとの関係がシステムティックにつながっている可能性が

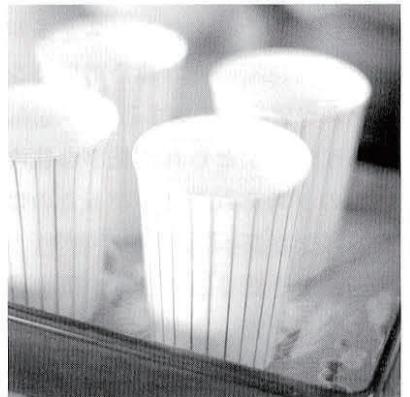


あるのではないかということです。

例えば、京都の町家で培われてきた生活文化の中に、ユニバーサルデザイン的な要素がたくさん見付けられるのではないでしょうか。荒川 建築でいうところの伝統工芸は町家かもしれません、町家を空間として見るとその構成は非常に分かりやすいといえます。

ミセ、ゲンカン、ダイドコ、ザシキと通りから奥に行くにしたがって、パブリックな場所からプライベートな場所へという変化が明快になっています。奥に通される

ほど大切なお客様として扱われているわけです。町家というのは障子やふすまで仕切られただけの連続した空間ですから、音や気配をシャットアウトすることはできません。お父さんがお客様を連れて奥の座敷に入ったということが、何となく子供たちにも伝わってきます。すると子供たちは、奥に行ったということは大事なお客様が来たわけだから、ちょっと静かにしよう、いたずらするのをやめようという気持ちになります。そういう空間の序列があったわけです。



あるいは、障子やふすまなどの建具を取り払ってしまえば、一つの大きなワンルームの空間にすることができます。そうすると、日常生活だけでなく、ハレの日の装いをしつらえることが可能になります。今の住宅では難しくなった結婚式とかお葬式も家の内でできた、このあたりはまさにユニバーサルスペースといえます。

また、伝統的な木造軸組構法のモジュール、つまり空間の基準となるスケールが統一されていることもユニバーサルデザインといえ

ます。京都でしたら、京間という畳のサイズで統一されていました。引っ越しするときは、大八車に畳をめくって積んで、ふすまや障子を外して積んで、着物は全部平らに積んで、食器のたぐいは一人分ずつ箱膽にしまいこんで積んで、あとはくるくるとお布団を丸めて積めばいい。新居についたら、持ってきた畳を敷いて障子を建てこめば、見事にぴったりと納まったわけです。

京都に限らず江戸の町家もそうですが、かつて庶民の住む家のはほとんどは貸家でした。その中で身の丈に応じた家、ライフスタイルに合った住宅に住み替えていくシステムが確立していました。戦後、持ち家政策がとられ、見事な住み替えのシステムがなくなったのは大変残念なことだと思います。

大石 そう聞くと、日本の町家は大変すてきだったという感じがします。そこには多分、スウェーデンの街角で不自由なかたをみんながすぐ手助けしていたという、ある種の生活規範のようなものが非常に豊かにあったのでしょう。今日はそれが多岐にわたっていますので、必ずしもうまくコミュニケーションができなくなってきているのかもしれません。

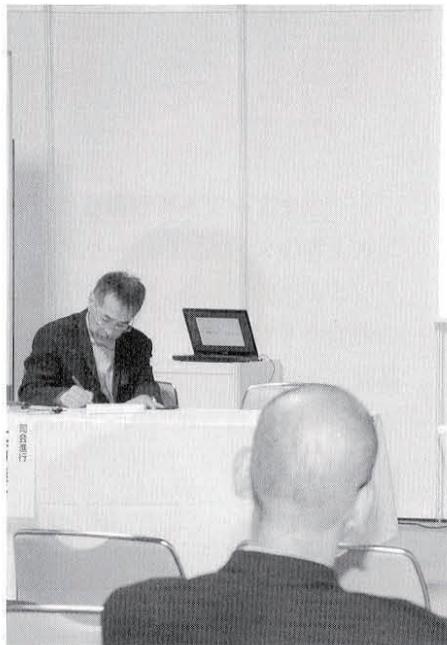
ユニバーサルデザイン宣言がなされたころは、一方でバリアフリーデザインができる、でもそれだけでは人々の十分なケアにはなっていないというのでユニバーサルデザインの考え方が出てきたように思うのですが、いかがでしょうか。

北條 バリアフリーの延長としてユニバーサルデザインというものを考えて、そう大きな間違いはないでしょう。ユニバーサルデザインはロナルド・メイスが提唱した活動で、その意図は単なる製品開発ではなくUD的な社会の実現にあります。その根底には公民権の考え方があり、例えば障がい者の方が障がいの為に段差などを超えられず建物に入れないなどの権利が阻害された場合には、その建物の持ち主は差別をしているという考え方をします。有名なADA法（障がいを持つアメリカ人法）はこの様な精神を法律にしたもので、障がい者の公民権法と呼ばれています。

この様に、単にモノのデザインだけなく、社会システムも含めて考えていくのが本来のユニバーサルデザインではないでしょうか。この国際ユニヴァーサルデザイン会議の開催趣旨の中でも、2002年の宣言には「一人一人の人間性を尊重した社会環境づくりをユニヴァーサルデザイン」と呼ぶと明記されておりその流れをくんで活動されています。

大石 我々がふだんやっているデザイン活動は、このユニバーサルデザインから大きく遊離しているのかというと、必ずしもそうではなくて、かなりの部分が共有されています。つまり、ユニバーサルデザインという言葉を無理やり使わなくても、デザインの中に含まれるべきではないかとすら感じます。

僕は建築の設計をしていますが、住宅というものは施主の人生観に



まで影響を与えるものです。しかし、その住宅は施主だけのものではなく、30年、50年と過ぎ去って施主以外の人も住むかもしれないということも考えあわて設計しています。それには人間としての生き方のプレのない軸のようなものがあって、その普遍性の高い軸を押さえつつ、時代性や地域性を加味してのデザインを求められているのだと思います。施主以外の人々がその空間に適応する、あるいは空間自体がいろいろな人に適応するということを、いつも想像して設計しています。それがユニバーサルデザインなのかもしれません。

荒川 今年の初めに築百十年という町家に引っ越しました。美しい街並みを造っている千本格子は残したほうが景観にとってはいいかもしないけど、町家がある通りは幅員が小さく、夜になると人気もなくなる。ですから、格子を立てて閉め切るよりもショーウィンドーのように明るい窓にしたほうがいいのではないかと考えました。それで、格子を外してガラス張り



にし、少しでも明るい街路空間を造ろうという発想に切り替えました。あるいは、風情ある木製の建具もすき間風がいっぱいで暖房効率も非常に悪い。ですから、思い切ってペアガラスのアルミサッシ、ただし銀色ではなくてそれなりに雰囲気の合うものに替えました。

また、1階は事務所として使用するため靴履きで上がれるように床を改造しました。こんなものは町家ではないというご意見もいただきますが、私は形を変えながらも空間の構成や職住一体の住まい方のシステムを残すことが大事だろうと考え、住み始めたところです。

実際に、構造的な補強もしっかりしたうえで、今のライフスタイルに合わせて改造をしたことで、本来ならばあと10年もたたないうちになくなる町家が残せたのではないかと思います。それから、住んでみると意外に住みやすい。例えば建て込んでいる町中でも風が通るように、坪庭の配置がうまくなされています。長い時代に培われてきた技術とか考え方、システ

ムの中に、確かにユニバーサルデザインと共に通ずる考え方に入っているということを感じています。それを引き継ぎ、現代の生活に合うように再提案できれば、京都らしいユニバーサルデザインの空間ができるといえるのではないかでしょうか。

北條 ふだんのデザイン活動に含まれるもの、あるいは自分が使いつながら改造を加えるという話がありましたが、それこそがユニバーサルデザインではないかと感じています。デザインという行為は本来、それぞれの人に合わせながらより多くの人に使ってもらおうという意識で進んでいます。だから、デザインの活動自体がユニバーサルデザイン的な発想を内包しており、ユニバーサルデザインはそれをより外に具現化したものといえるでしょう。

ヨーロッパではユニバーサルデザインという代わりにインクルーシブ・デザインという言い方をしますが、それはユニバーサルデザインという特別なデザインではなく、障がい者も含めて考えたみんなに対して使いやすいという事がデザインの目標である、その為のユーザー参加型のデザイン手法がインクルーシブデザインである、という考え方です。要は、ユーザーの側に立ってどうあるべきなのかと考え変えていく、そのデザインの行為自体がユニバーサルデザインの考え方に入っている気がします。

荒川さんが町家をどんどん改修されて、従来の町家像からは離れ

ているが、町としての暮らしが上がっていくというのは、デザインのクオリティを上げていくにつながるのではないかでしょうか。

ユーザーに近いところにいることが職人の強みです。大企業でのデザイン開発、製品開発はどうしてもユーザーから遠いところでデザインされています。今後、日本が工業化社会をどうしていくかというときに、切り口の一つとして職人の存在があると私は考えております。そういう小さなモノづくり、ユーザーに近いところで作れて、考えながら少しずつ変えていくモノづくりというのは、製品としてのクオリティが非常に高い。結果として、ユニバーサルデザインとしてのクオリティが高いモノづくりになります。

地方の伝統産業の現場では、お客様のところに行って、あるいはお客様が作家のところに来てモノづくりをされています。相手に合わせてどんどん変えていきます。そういったところに新しい知恵があり、新しい日本のデザインがあるのでないかと考えています。

大石 ふだん我々がやっている活動にユニバーサルデザインの理念を意識的に踏まえてデザインしていきましょうということですね。さて、ユニバーサルデザインにも造詣の深い都市計画家の三輪先生が急遽お見えになりました。図らずも、「私もユニバーサルデザインについて一言ある」とのことでのまとめの意見をいただければと思います。



●コメント

三輪泰司
京都デザイン関連団体協議会 議長

私は今、京都造形芸術大学で大学院生のキム君を一人担当しております。彼の「街路空間の造形計画に関する基礎的研究」という学位論文の関係で、ユニバーサルデザインについてもう一度勉強したわけです。

先ほどお話がありましたが、第一次世界大戦後の1920年ごろにアメリカでは国家職業リハビリテーション法ができています。これは、第一次世界大戦における負傷兵たち

を救済し、社会復帰を図ろうという考え方です。思想的にはこの辺が大変面白くて、その後の公民権の問題、あるいはADA法の思想も、障がいのある人も一人前に扱うと同時に、普通に能力に応じて社会にも貢献してもらう、納税者にもなってもらうという考え方です。

ところで、学位論文でキム君がやっているのは、子供の歩行環境、特に通学路の調査研究です。そこで調べていると、何だ、昔からあるじゃないかということです。今、学校は通学の安全ということで集団登校などやっておりますが、必ずしも学校で決めた集合地点を守っていないのです。つまり、子供たちが集まりやすい、安心できるところがあるのですね。これは古い京都周辺の町ですと、昔からのお地蔵さんや祠があったところ、こういうところが昔から何となく集まりやすいし、見通しもよく安全な場所になっている。あるいは、今の新しい住宅街ですと、優しいおばあちゃんがいて、ちょっとへこんでいて、その玄関先のようなところに集まっているのですね。

ユニバーサルデザインでも、日本はしばしば言葉とか形とかを輸入してしまいますが、もともとあるじゃないかと。そういうものを新しい視点で見て、こういうところにちょっとしたへこみを作ってやればいいということがあるのでないかというのが、今、キム君が到達している結論です。先ほどから、お二方のお話を聞いて、これは彼の研究もかなりいい線いっていたなと安心しているところです。

大石 これから私たちが何をするのか、模索しながらも、自分たちの居場所が見えてきた気がしました。

この京都デザイン会議はもともと、生活の道具や建築を含んだ環境を京都でどのように展開していくかを語っていく会議だと思っています。京都におけるデザインの在り方を考えるうえで、ユニバーサルデザインというのも含めて検討し協議していくことを、今日をスタートに。ということで結論にしたいと思います。両先生ありがとうございました。

(拍手)

国際ユニヴァーサルデザイン宣言

一步踏み込んで、一人一人の人間性を尊重した社会環境づくりを
ユニヴァーサルデザインと呼び、使い手と作り手の関係を再構築することで、
社会のすべての面に適用されるべき人間中心のしくみ作りを急ぐことが重要

京都デザイン団体関連協議会

議長 三輪 泰司

副議長 久谷 政樹

実行委員長 大石 義一

実行委員 小山比奈子

竹林 善孝

土居 英夫

永田 義博

社団法人京都デザイン協会 機関誌
DIALOGUE2007

テーマ「京都とユニバーサルデザイン」

発刊日 平成19年3月

発行 京都デザイン団体関連協議会

事務局 (社)京都デザイン協会

〒602-8233

京都市上京区葭屋町通

中立売上ル福大明神町128

京都西陣町屋スタジオ1F

TEL.075-415-8008

FAX.075-415-8028

本誌掲載の記事・写真などの無断転載を禁じます。



平成18年10月23日(月) 16:00~17:00
国立京都国際会館イベントホール